

『大鏡』時平伝考

著者	礪波 美和子
雑誌名	大和大学研究紀要
巻	1
ページ	240-249
発行年	2015-03-16
URL	http://id.nii.ac.jp/1677/00000035/



『大鏡』時平伝考

礪波 美和子

(大和大学教育学部教育学学科国語教育専攻)

要旨

紀伝体で書かれた歴史物語『大鏡』の列伝六番目の左大臣藤原時平伝には、菅原道真の左遷の記事が挿入されている。時平伝の内容は、年譜・系譜を別にする、道真左遷・時平一族の早世・時平の逸話からなり、道真左遷は半分を占める。道真は漢学の才能がある人物として描かれ、対して時平は漢学の才能が劣っている人物として描かれている。逸話の部分で時平は現実生活进行处理していく智恵・才覚・胆力などがある大和魂のある人物として描かれる。本論文前半では、大和魂を中心に引き上げ、時代は下るが、摂政関白には漢学の素養は必ずしも必須ではなく、大和魂があれば天下は治まるという大江匡房の言に時平は叶っていることを述べた。後半では、高等学校教科書に載る『大鏡』左大臣時平伝は道真左遷を中心にし、心情をたどる上で和歌や漢詩が重要な役割を果たしており、散文・韻文を総合的に理解するのにふさわしい教材であることを述べた。

キーワード 大鏡・藤原時平・菅原道真・大和魂・左遷

一

大和大学オープンキャンパスで学生達が着用したTシャツの背中に筆文字で記された「大和魂」という語は、大阪府出身の大相撲力士豪栄道が、大関昇進伝達式において「これから大和魂を貫いて参ります」と述べ、話題になった。

ジャパンナレッジ¹⁾の検索機能を用い、「大和魂」を新編日本古典文学全集の中で探すと、『源氏物語』(3)少女と『大鏡』「(五一)時平、過差を止める」の二例のみがヒットする。

『大鏡』時平伝²⁾では、悪事のため時平の子孫が絶えた話の後の逸話に、

時平は「さるは、大和魂³⁾などは、いみじくおはしましたるものを(その実、このおとど(時平)は、世間的な知恵・才覚などがたいそうすぐれていらつしやったのですがなあ)」と「大和魂」を持っていた人だと評価されている。

秋本宏徳氏は「『大鏡』における時平像の形成³⁾」で、

時平の本性を端的に表す資質として、逸話に先立って予め付与されている「大和魂」については、すでに多くの先行研究があり、「漢学の知識(漢才)」に対する語で、現実生活进行处理していく智恵・才覚・胆力などがあること」(新編全集『大鏡』八八頁)などと説明されるのが一般的である。(中略)『源氏物語』に次いで物語史上二

例目となる、『大鏡』における時平の「大和魂」も、「右大臣は、才世にすぐれめでたくおはしまし」(七一頁)とされる道真との対照的な人物造型のために与えられた資質であり、『源氏物語』同様、「才」を対置することによって初めて用い得た語であった。「大和魂」の根源的な語義は「平易に言えばチエである」にも拘らず、「魂」にことさら「大和」が冠せられているのも、「才」が「漢_レ学_ノの知識」であることを意識してのことにも他なるまい。なお、「漢才」の語は管見の限りでは十二世紀中葉の『中外抄』に至るまで見出せない。このことは、平安時代においては「才」が「漢」を冠するまでもなく「漢学_ノの知識」を意味することが自明であつたことを証しているように。

と述べる。「漢才」は後世「大和魂」と同義の「和魂」^④と対にして「和魂漢才」と用いられることが多い。『日本国語大辞典』^⑤は、

わこん・かんさい【和魂漢才】「名」(「やまとだまし」と「からざえ」を漢語の対句としたもの) 学問としての漢学を学ぶと同時に実際の事例に対しての適切で総合的な判断力の必要をいっただもの。後世、「やまとだまし」の語義の推移につれて変化し、日本人固有の精神をもつて中国伝来の学問や知識を取捨・活用することの必要性と重要性を説く理念を表わす語となった。

とし、用例として、最初に

*菅家遺誠(鎌倉末か) 一「凡_レ国学所_レ要、雖_レ欲_レ論_レ涉古今_一究_中天人_ハ其自_レ非_二和魂漢才_一、不_レ能_レ闕_二其闡奥_一矣」

を載せる。しかし日本思想大系^⑥の校注者大曾根章介氏は「菅家遺誠」は「菅原道真に仮託されているが、後世の偽作であることは確実である。(中

略) 近世に至って巻一末尾に二条が竄入し、特にそのうちの一条に「和魂漢才」の語があることから、平田篤胤らの宣揚するところとなり、世にもてはやされるものとなった。北野天満宮信仰との結びつきもあって、影響力は大きく、近世国学の神国思想にも援用され、ついに聖典視されるに至っている」という。日本思想大系は古い形を留める陽明文庫本を底本とし、この条はない。

国会図書館近代デジタルライブラリー掲載の国会図書館蔵『菅家遺誠』(嘉永五(一八五二年刊)^⑦)は、巻一末尾にこの条を載せた後、

右二則者遺誠中之眼目也既記於北野社東之碑焉学漢籍者可用心之
第一也

と述べている。さらに、巻二の巻末でこの条を注し、源氏物語・今昔物語・後拾遺和歌集・愚管抄・百寮和歌の用例を載せている。

『大鏡』左大臣時平伝の冒頭、「(四三) 菅原道真と朝政を執る道真の左遷」には、

このおとどは、基経のおとどの太郎なり。御母、四品彈正尹人康親王の御女なり。醍醐の帝の御時、このおとど、左大臣の位にて年いと若くておはします。菅原のおとど、右大臣の位にておはします。その折、帝御年いと若くおはします。左右の大臣に世の政を行ふべきよし宣旨下さしめたまへりしに、その折、左大臣、御年二十八九ばかりなり。右大臣の御年五十七八にやおはしましけむ。ともに世の政をせしめたまひしあひだ、右大臣は才世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても、ことのほかにかしこくおはします。左大臣は御年も若く、才もことのほかに劣りたまへるにより、右大臣の御おぼえことのほかにおはしましたるに、左大臣やすからず思したる

ほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ためによからぬこと出でて、昌泰四年正月二十五日、太宰権帥になしたてまつりて、流されたまふ。

と、右大臣道真は漢学の才能がまことにすぐれていらつしやる上に、ご思慮も格別深いのに対して、左大臣時平は年も若く、漢学の才能も格段に劣っていたため、右大臣道真に対する天皇のご信任が篤く、左大臣時平は心穏やかでなかったことが記され、それが、道真左遷の原因と語っている。それに対し、本論文の冒頭に引用した時平の大和魂の例は、「(五二) 時平、過差を止める」に、

さるは、大和魂などは、いみじくおはしましたるものを。延喜の、世間の作法したためさせたまひしかど、過差をばえしづめさせたまはざりしに、この殿、制を破りたる御装束の、ことのほかにめでたきをして、内にまゐりたまひて、殿上にさぶらはせたまふを、帝、小部より御覧じて、御気色いとあしくならせたまひて、職事を召して、「世間の過差の制きびしき頃、左のおとどの、一の人といひながら、美麗ことのほかにてまぬれる、便なきことなり。はやくまかり出づべきよし仰せよ」と仰せられければ、うけたまはる職事は、「いかなることにか」と怖れ思ひけれど、まゐりて、わななくわななく、「しかじか」と申しければ、いみじくおどろき、かしこまりうけたまはりて、御随身の御先まゐるも制したまひて、急ぎまかり出でたまへば、御前どもあやしと思ひけり。さて本院の御門一月ばかり鎖させて、御簾の外にも出でたまはず、人などのまゐるにも、「勘当の重ければ」とて、会はせたまはざりしにこそ、世の過差はたひらぎたりしか。内々によくうけたまはりしかば、さてばかりぞしづま

らむとて、帝と御心あはせさせたまへりけるとぞ。

と、醍醐天皇が度を超した贅沢を抑えられなかった時、一人の人である時平が禁制を破った派手な装束で参内して天皇の勅勘に合い、一月程謹慎したところ、はじめて世の中の贅沢が収まったという話が記されている。そして、実は、時平が醍醐天皇と心を合わせ、なかなか改まらなかった贅沢をやめさせたのだと記されている。同話が『今昔物語集』⁽⁸⁾巻第二十二「時平大臣取国経大納言妻語第八」に、

今昔、本院ノ左大臣ト申ス人御ケリ。御名ヲバ時平トゾ申ケル。昭宣公ト申ケル関白ノ御子也。本院ト云フ所ニナム住給ケル。年ハ僅ニ三十許ニシテ、形チ美麗ニ有様微妙^{めてた}キ事無限シ。然レバ、延喜ノ天皇此ノ大臣ヲ極キ者ニゾ思食タリケル。

而ル間、天皇世間ヲ拈^{したため}御シマケル時ニ、此ノ大臣内ニ参給タリケルニ、制ヲ破タル装束ノ、事ノ外ニ微妙クシテ参給タリケルヲ、天皇小櫛ヨリ御覧ジテ、御気色糸懸シク成セ給テ、忽ニ職事ヲ召テ仰セ給ヒケル様、「近來世間ニ過差^{きびし}ノ制蜜^{みつ}キ比、左ノ大臣ノ、一ノ大臣ト云フ乍^{なか}ラ、美麗ノ装束事ノ外ニテ参タル、便無キ事也。速ニ可罷出キ由、慥^{たしか}ニ仰セヨ」ト仰セ給ケレバ、綸言ヲ奉ハル職事ハ極テ恐リ思ヒケレドモ、篩^{ふる}々^ふフ、「然々ノ仰セ候フ」ト大臣ニ申ケレバ、大臣極テ驚キ畏マリテ忿^{いそ}ギ出給ヒニケリ。隨身雑色ナド御前参ケレバ、制シテ、前モ令追^{おはし}メ不給デゾ出給ヒケリ。前驅共モ此ノ事ヲ不知ズシテ怪ビ思ヒケリ。其ノ後、一月許本院ノ御門ヲ閉テ、簾ノ外ニモ不出給ズシテ、人参ケレバ、「勅勘ノ重ケレバ」トテゾ不会給ザリケル。後二程経テ被召テゾ参給ヒケル。此レハ早ウ、天皇ト吉ク□合セテ、他人吉ク誠メムガ為ニ構サセ給ヘル事也ケリ。(後略)

とある。『今昔物語集』の時平の話は、『大鏡』とほぼ同じであるが、「大和魂」と言う語はない。

醍醐天皇が、贅沢を嫌ったことは、『江談抄』二二二八「延喜の比、束帯一具をもつて両三年を経る事」に、「また談りて云はく、「延喜の比、上達部の時服は美麗なるを好まず」とあり、『古事談』一一一〇にも「延喜の比、上達部の時服美麗なるを好まず」とある。

新聞一美氏は、「藤原時平について―道真左遷の主謀者」で、藤原氏の一人の時平を「ここには、女性に対し積極的に振舞う光源氏型の貴公子の姿が見える。後撰集には、時平と女性に関わる歌が目立ち、そのような時平の姿が窺えるが、それまでの藤原氏の氏の長者にはなかったことではなからうか」と述べる。光源氏型の貴公子のような時平であったからこそ、禁制の派手な装束で参内して天皇の勅勘に合い、一ヶ月程謹慎するという行為が真実味をおび、それまで抑えられなかった贅沢をやめさせることができたと考えられる。そして、その行為を『大鏡』時平伝では大和魂と評している。

なお、藤原克己氏は、「日本の律令官僚制と「大和魂」」で、「わが国の令制では、任官試験及第者に対する叙位規定のほうは、それが唐制で定められていたところの品階を大体そのままが国の位階に引きうつしたものであったのに対し、蔭位による叙位規定は唐制のそれよりも著しく高く設定されていた。（中略）院政期の硯儒大江匡房が、「摂政関白必ずしも漢才候はねども、大和魂だにかしこくおはしまさば、天下はまつりごたせ給ひなん」と道破したことが『中外抄』に伝えられているが、そのような漢才の位置づけは、実はすでに令制の当初から潜在していたのだといえよう。そうしてこの漢才に対する「大和魂」についても、現

在文献におけるこの言葉の用例は、かの『源氏物語』少女巻の、学者達が貧しく頑なな姿で物語（当の『源氏物語』も含めて）に戯画化される時代を背景に、光源氏をして敢えて「なほ才（漢才）を本としてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ」といわしめたその言葉を初出とするのであるけれども、中国にならって律令制を導入し支配体制の再編成を行ないながら、このように伝統的な氏姓的身分秩序が巧みに温存されていたところにもすでにそれが発動していたことを考えてみなければならぬと思われる」と述べる。

二

高等学校教科書に取り上げられている『大鏡』の時平伝は、

[A] 大修館書店『新編古典』（二〇一三年）

大鏡 道真左遷

七行のあらずじあり。

- ・ 右大臣は、君が住む歌
- ・ 筑紫におはしますこの詩、いとかしこく人々感じ申されき。

末尾に「（左大臣時平）」とあり

[B] 三省堂『精選古典B』（二〇一四年）

大鏡 東風吹かば

- ・ 醍醐の帝の御時、駅長莫驚の漢詩

末尾に「（左大臣時平）」とあり

都府楼の鐘

・筑紫におはしますこの詩、いとかしこく人々感じ申されき。

・やがて彼処にて申すめりしか。

末尾に「(左大臣時平)」とあり

〔C〕筑摩書房『古典B 古文編』(二〇一四年)

大鏡 (二) 菅公配流 (時平)

・醍醐の帝の御時々昔の博士ども申しけれ。

(筑摩書房『物語・評論選古典講読「古文」』(二〇一二年)も同じ箇所)

〔D〕明治書院『精選古典B 古文編』(二〇一四年)

大鏡 道長の左遷

・醍醐の帝の御時々夕されば歌

・筑紫におはしますこの詩、いとかしこく人々感じもうされき。

末尾に「(左大臣時平)」とあり

というように、菅原道真の左遷・配流を中心にしており、時平伝の一部であることは、丸括弧付きで本文の末尾や題に付されているのみである。さらに、「中略」の注記もなく、『大鏡』の本文の途中を割愛している。新編日本古典文学全集の時平伝の本文と比較したところ、教科書における一行分の空白が、「中略」を意味しているようである。

「学習の手引き」「学習のポイント」では、抜粋であることには触れられず、道真の心情をたどる課題がある。国文学概論Ⅰの講義において、〔A〕〔B〕の教科書と新編日本古典文学全集の本文の比較を行った際、学生から「どうして途中をカットし、この部分を載せたのか」という素朴な疑問

が出た。

高橋広満氏は「国語教育と近代文学研究のあいだ―小・中学教科書教材等を介在させて―」¹³⁾で、

Ⅱ 国語教科書に求められるもの―完結性と正当性

志向の隔たりについて述べる前提として、国語教育の根幹となる教科書教材の持つ性質に触れなければならない。ここでは、とくにその〈完結性〉と〈正当性〉に注目する。

国語教科書の教材の大半は、もともとそこだけで読まれるように書かれたのではない場合にも、それだけで一つのまとまりをもつ文章として扱われている。原文から独立した一作品として。教材は、書き下ろしを除けば、それ以前に書かれたものである。収録の際、いわゆる教材化が行われる。短編小説のような、原作をそのまま収めたものでも、様々な手が入る。長編小説の一部が採用される場合には、あらすじの書き方も含め、その姿はより様々になる。それらがみな、完結した作品なのだ。(中略)ともあれ、教材は原文に復元されたり、別の補いを受けて読まれるように仕組まれてはいない。単元を構成する上では複数の中の一文章であっても、それはジャンルやテーマでくくられているだけであり、文章の非独立性を指してはいない。指導書も教材ごとに執筆者が違うのも普通のことだ。

教材には必要に応じて注や作者紹介などがついていて、それ以上の周辺情報がたとえ教師の努力で話される場合でも、教材理解は、そこに書かれてあることと、当該学年としての当然の知識以上のものを動員しなければならないように出来ていない。あくまでも、注や学習の手引きを含めたまとまりが、そこですべてである。完

結性と言ったのはその意味である。以上のことは、おのずと教材の正当性確保へという力ともなっている。

と述べる。近代文学について書かれた文章であるが、古典においても同様であろう。しかし、教材研究として周辺情報を調べる意義はあると考える。

周知のとおり、歴史上のできごとに基づいて仮名文で書かれた歴史物語の代表的な作品で四鏡の最初作品である『大鏡』は、天皇の伝記「帝紀」と有力政治家の伝記「列伝」を中心とする「紀伝体」という方法で書かれている。序における大宅世次の言葉に「ただ今の入道殿下の御有様の、世にすぐれておはしますことを、道俗男女の御前にて申さむと思ふが、いとこと多くなりて、あまたの帝王・后、また大臣・公卿の御上をつづくべきなり。そのなかに、幸ひ人におはします、この御有様申さむと思ふほどに、世の中のこのかくれなくあらはるべきなり」とあり、藤原道長の栄華の様子を描くことを目的に、多くの天皇・皇后、大臣・公卿の身の上を述べる。列伝には左大臣冬嗣から太政大臣道長まで藤原氏の二十人の伝記が記され、道長伝に挿入される形で始祖鎌足からの藤原氏物語、昔物語の雑々物語、流布本ではさらに後日物語が記される。列伝六番目の左大臣時平伝には、菅原道真の左遷の記事が挿入されている。時平伝の内容は、年譜・系譜は別にすると、道真左遷・時平一族の早世・時平の逸話からなっている。松本治久氏は「大鏡「時平伝」菅原道真左遷の記事―漢詩と和歌についての検討^①」で、

「時平伝」の道真左遷は、歴史の裏面を語ったものとして評価されており、「花山天皇紀」の、花山天皇御出家とともに、本書の眼目の一つに数えられている。(中略)「時平伝」の道真左遷は、これ

が無実のものであるとくり返し述べてはいるが、それについて具体的に述べていない。(中略)「時平伝」は、道真左遷と時平一族の早世が骨子になっている。『大鏡』は藤原北家の歴史を語ったものであるから、「時平伝」は、時平とその一族について述べるのが、本来の目的である。従ってここで道真の左遷を語ったのは、時平やその一族がなぜ早世したのか、その理由を述べるためであった。そのため、左遷の悲歎を語って、道真が怨霊になり、時平一族に怨みをむくいたと語ることが必要だった。道真の悲歎は、その漢詩や和歌によって述べられている。このように道真左遷という悲劇が、時平一族の不幸をよぶことになったという点、ここに読者の関心をひく一つの理由があったのではないか。

と述べる。時平一族の早世の原因は、「時平の讒奏によって左遷された菅原道真の怨みによる」とされる。

新聞一美氏は「藤原時平について―道真左遷の主謀者^②」で、

時平の事跡は常に右大臣菅原道真の太宰権帥への左遷とともに語られる。大鏡は、三十九歳で早逝した時平と子孫について「あさましき悪事を申しおこなひ給へりし罪により、このおとどの御末はおはせぬなり」と述べている。「あさましき悪事」とは道真の左遷を謀ったことであり、「御末おはせぬ」とはその「罪」によって子孫は多く早逝し、栄華からは見放されたことを言う。しかし、これは余りに後世的な歴史観というものである。延喜三年(九〇三)に大宰府で没した道真の怨霊は祟りをなし、恐れた朝廷は死後贈位などの慰霊を繰り返すが、それは時平の没した遙か後のことである。(中略)弟忠平(貞信公)の系統が繁栄したため、大鏡も忠平に肩入れ

している。実際には、権力者としての忠平が時平の子孫の英達を阻んだという側面もあろう。忠平像が子孫によって理想化され、時平の子孫の不幸は忠平の権力によるものではなく道真の怨霊のせいである、という解釈が一般化されて行った。北野天神縁起などに見られる、道真左遷を理由とする醍醐天皇墮地獄説話と同種の後世的偏見がここにはある。

と述べる。川口久雄氏による菅家文章第九奏状⁶⁰⁶「上」太上天皇〔宇多上皇〕、請_レ令_三諸納言等共参_二外記_一「状」の解説には、

寛平九年七月三日、三十一歳の宇多天皇は、十三歳の新帝に位を譲った。この時の讓位は、宇多天皇が道真一人に相談したといわれ、これが他の公卿たちの反感を買って彼を孤立に追いこんだといわれる。寛平遺誠をよむと、時平は「政理に熟しているが先年女事において失う所あり」といい、これを顧問にせよといいつつ、道真は「鴻儒なり、深く政事を知る」ものとして、この功臣を信頼せよといっている。この翌年すなわち昌泰元年七月、時平と道真はともに正三位に叙せられた。他の納言たちは、こういう人事に対して平らかならぬものが積って行き、去年の讓国の詔に「春宮大夫藤原朝臣〔時平〕、権大夫菅原朝臣〔道真〕、少主未長之間、一日万機之政、可奏可請之事、可宣可行云云」とあり、奏請や宣行のことは「両臣〔時平と道真〕に非ざるよりは更に勤むべからず」とうけとつて、彼らは政務に関与することを否認されたと考えたようであり、その結果納言たちが外記庁に出仕して政務をみることを怠るようになつたとみられる。そこで道真は上皇にそのことを訴えて、諸納言たちを説得してほしいという本状を奏上したのである。本状は悲劇にいた

る伏線として重要な意味をもつと考えられる。

と記される。新聞一美氏は、「寛平御遺戒」の文言に対し、「時平は先年女のこと失態を犯した、自分はそのことは忘れて政治に専心するよう激励したというのである。ここには、女性に対し積極的に振舞う光源氏型の貴公子の姿が見える。後撰集には、時平と女性が関わる歌が目立ち、そのような時平の姿が窺えるが、それまでの藤原氏の氏長者にはなかったことではなかるうか」と述べる。

小林由美子氏は「大鏡「時平伝」考」¹⁸で、

菅原道真は、一介の学者であり受領階級に過ぎなかったが、宇多帝の信頼と寵愛を受けて、醍醐帝即位という御世がわりには、藤原時平と共に政治の補佐役として選ばれるという、破格の扱いを受けるに及んだ。(中略)宇多天皇は立太子問題や讓位という天下の最重要事を、「密々」道真のみに相談され、道真もその信頼に応えるべく、天皇のなさることを疑問に思えば、「封事」や「直言」を呈して、率直に諫正申しあげたという。(中略)昌泰四年正月七日には従二位に叙された。父である是善が三位止まりであり、一族の中にも中納言まで昇っていない中で、全く異例の出世である。受領階級の学者が右大臣にまでのぼるという出世は、人々を驚かし恐れを抱かせた。

と述べる。南里みち子氏は「時平像の形成」¹⁹で、

道真は宇多天皇の信任が篤く、その拔擢、異例の昇進も、天皇が藤原氏の専横をおさえることを意図したものであった。道真の左遷は、時平を中心とする反道真勢力の工作であり、藤原氏による他氏排斥の一つと考えられる。

と述べる。

菅原道真が異例の昇進をしたことは、諸氏の系図を集成・編集した書物である『尊卑分脈』⁽²⁴⁾や公卿を対象とする毎年の官員録である『公卿補任』⁽²⁵⁾の記載をたどっていくとわかる。

『公卿補任』によると、菅原道真は宇多天皇の寛平五（八九三）年に四十九歳で参議、従四位下になり、初めて記載される。寛平七（八九五）年に中納言、従三位になり、藤原時平と同位となる。寛平九（八九七）年、唯一の大臣であった右大臣源能有が五十三歳で亡くなり、時平は大臣不在のこの年の最高位である大納言に、道真は権大納言になる。天皇が代わり、醍醐天皇の昌泰元（八九八）年（寛平十年）、時平と道真は共に正三位となり、昌泰二（八九九）年に時平は大納言から左大臣に、道真は権大納言から右大臣になる。そして、昌泰四（九〇二）年時平と道真は共に従二位となった後、道真は「左遷太宰員外帥」と左遷される。昌泰四年（延喜元年）の記載には、延喜三年に任所にて道真が五十九歳で薨じたことや、その後の数々の追贈が記されている。

年毎に記される『公卿補任』を直接読み解いていくことが大事であるが、漢文で書かれているため難しいと感じ、わかりにくいようであった。講義では、二〇一四年に勉強出版から刊行されたばかりの『公卿補任図解総覧』⁽²⁶⁾を用い、見開き二頁となっている寛平二（八九一）年から延喜十（九一〇）年まで、藤原時平と菅原道真の昇進を色違いのマーカーを用いてたどってもらったところ、道真の異例の昇進が実感できたとの声があがった。

教科書の「学習の手引き」では、和歌に見られる道真の心情をたどってみよう、白居易と道真の漢詩について、全体がどのような詩か調べて

みよう、どのような心境を表現しているか考えてみようといった課題があった。講義では、[A]『新編古典』の学習のポイントの課題を受講生各自で調べ考えてきてもらい、教科書の注を利用しながら、本文・和歌・漢詩の読解を行うとともに、『和漢朗詠集』⁽²⁷⁾『日本紀略』⁽²⁸⁾『菅家後集』⁽²⁹⁾『枕草子』⁽³⁰⁾『中国詩人選集』⁽³¹⁾『白居易下』の該当箇所を配り、さらに読みを深めるようにした。教科書の元となっている新編日本古典文学全集の該当箇所も配り、[A]『新編古典』・[B]『精選古典B』では、どの部分かとられているかわかるように、各自しるしを付けるよう指示し、教科書でカットされた部分に関しても読み説いた。

また、菅原道真左遷の記事に関しては、東京大学史料編纂所の公開データベース⁽³²⁾の利用方法をプロジェクターを使い実演した。配布資料には、大日本史料総合データベースで「道真」で検索した結果を載せるとともに、一つ目の「和暦年月日・延喜1年1月25日／条 1／綱文右大臣道真を貶して、大宰権帥と為し、大納言源光を右大臣に任ず、依りて、宇多上皇、禁中に御幸あらせらる、尋で、大学頭菅原高視等を諸国に左遷す、／合致 0／区分 大／編 1／冊 2／補 0／頁 798／画 刊」に関して、冊子体の『大日本史料』⁽³³⁾第一編之二の当該箇所の冒頭（七九七頁から七九九頁）のコピーを配り、記事の末尾が八四三頁であることを伝えた。

『大鏡』は関連のものに漢文が多く、苦手意識が多く見られたが、子を思う気持ちなどは、今と同じであることを認識してもらった。

『大鏡』は物語の一つ歴史物語に分類されているが、道真左遷では心情をたどる上で道真の和歌や漢詩が重要な役割を果たしている。学習のポイントも文法以外は和歌・漢詩に関することが中心となっている。散

文・韻文を総合的に理解するのにふさわしい教材である。

注

- (1) <http://japanknowledge.com/> 二〇一四年一〇月一五日検索
- (2) 『大鏡』新編日本古典文学全集34 小学館、一九九六年。以下、大鏡の引用はこれによる。ふりがなは一部にとどめた。傍線―礪波。
- (3) 秋本宏徳『「大鏡」における時平像の形成』『国語と国文学』東京大学国語国文学会 二〇〇三年六月
- (4) ジャパンナレッジで「和魂」を検索すると、新編日本古典文学全集八十八巻中、『日本書紀』に二例、『出雲国風土記』に一例、『萬葉集』に一例、『今昔物語集』に一例ヒットする。『今昔物語集』のみ「才」との対比で、他は「荒魂（あらみたま）」と対の「和魂（にぎみたま）」である。
- (5) 『日本国語大辞典』第二版第十三巻 小学館、二〇〇二年
- (6) 『古代政治社会思想』日本思想大系8 岩波書店、一九七九年
- (7) 国会図書館近代デジタルライブラリー『菅家遺誠』二巻、<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/25433229> 二〇一四年一〇月一七日閲覧
- (8) 『今昔物語集』新編日本古典文学全集37、二〇〇一年
- (9) 『江談抄』新日本古典文学大系32 一九九七年
- (10) 『古事談』新日本古典文学大系41 二〇〇五年
- (11) 新聞一美「藤原時平について―道真左遷の主謀者」『国文学解釈と鑑賞』至文堂、二〇〇二年四月、特集Ⅱ学問の神様・菅原道真―没後二一〇〇年 道真と邂逅の人々
- (12) 藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』Ⅳ 平安朝漢文学の展望 1 平安朝漢文学の歴史社会的基盤―中国との比較を視座として― 東京大学出版会、二〇〇一年
- (13) 高橋広満「国語教育と近代文学研究のあいだ―小・中学教科書教材等を介在させて―」『早稲田大学国語教育研究』第31集、二〇一二年三月、〈特集〉文学・語学研究と国語教育の連携を探る
- (14) 松本治久「大鏡「時平伝」菅原道真左遷の記事―漢詩と和歌について―の検討」『講座平安文学論究第七輯』風間書房、一九九〇年
- (15) 新聞一美前掲(11) 論文
- (16) 『菅家文章 菅家後集』日本古典文学大系72 岩波書店 一九六六年、校注者川口久雄
- (17) 新聞一美前掲(11) 論文
- (18) 小林由美子「大鏡「時平伝」考」『東京成徳国文』第8号、一九八五年三月
- (19) 南里みち子「時平像の形成」『語文研究』第七十二号 九州大学国語国文学会、一九九一年十二月
- (20) 新訂増補国史大系『尊卑分脈』吉川弘文館、一九七四年
- (21) 新訂増補国史大系『公卿補任』吉川弘文館、一九八八年
- (22) 『公卿補任図解総覧 大宝元年(701)～明治元年(1868)』勉誠出版、二〇一四年。これまでも『公卿補任年表』(山川出版社、一九九一年)があったが、より詳細になった。
- (23) 『和漢朗詠集』新編日本古典文学全集19 小学館、一九九九年
- (24) 新訂増補国史大系『日本紀略』吉川弘文館、一九八八年
- (25) 前掲(16)『菅家文章 菅家後集』日本古典文学大系72

- (26) 高校教科書『新編古典』大修館書店 二〇一三年
- (27) 『中国詩人選集』第13巻「白居易下」岩波書店、一九五八年
- (28) <http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/db.html> 東京大学史料編纂所の公開データベース 二〇一四年六月二十七日検索
- (29) 『大日本史料』第一編之二 東京大学出版会、一九六八年「E」画像を表示するビューワが使えれば、東京大学史料編纂所のホームページ上で冊子体の画像を一頁ずつ閲覧することができる。

参考文献

- 河北 騰編 『日本文学研究大成 大鏡・栄花物語』国書刊行会、一九八八年
- 松村博司 『国語国文学研究叢書第34巻 栄花物語・大鏡の成立』桜楓社、一九八四年
- 福長 進 『歴史物語の創造』笠間書院、二〇一一年
- 山中 裕 『栄花物語・大鏡の研究』思文閣出版、二〇一二年
- 滝川幸司 『菅原道真論』塙書房、二〇一四年

(となみ みわこ)